

## 「鉤状巻雲の観察」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

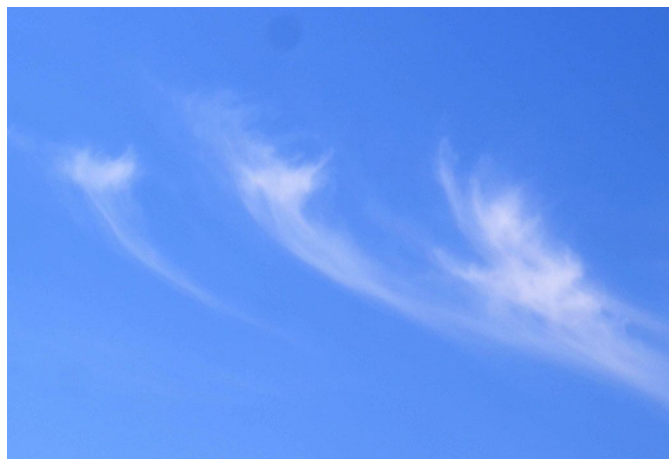
今日の2校時、5年の「天気の変化」の学習中のこと。窓際の子どもが「あ、先生、なんか、きれいな雲が出てる！」という。見れば、確かに青空に美しい白い雲が浮いていた。



さっそく子どもたちと屋上に出て「雲の観察会」を開いた。気象の単元では、このような速攻性が非常に重要だと思う。教室から見えていた雲は、典型的な「巻雲」だった。巻雲(けんうん)は、高度10000m前後の場所に現れる非常に薄い雲で、「すじ雲」とも呼ばれる。もちろんこの高度ではすべて氷晶雲である。



実は「巻雲」にはさまざまなバリエーションがある。「濃密巻雲」「幕状巻雲」「毛氈(けまり)巻雲」「変化巻雲」など種類は多い。この子どもは授業に雲の図鑑を持参していて、実際に出ていた雲の同定を試みていた。植物の同定とちがって、雲はすぐに変化・移動してしまうので、時間との勝負である。



この日に出ていた巻雲は、「鉤状巻雲」(かぎじょうけんうん)と呼ばれる、巻雲としては典型的な形状の雲だった。「鉤状巻雲」の字を充てることもある。上空の気流の動きによって、雲塊が引き伸ばされて形成される。もう少し漏斗状の形状のものも多く、その場合は「尾曳巻雲」(おびきけんうん)と呼ばれることもある。いずれも対流圏上層に水蒸気が流入している証拠で、天気はゆっくりと下り坂になることが多い。



観察時間は10分ほどだったが、その間にも巻雲は少しずつ形状を変え、また南西から北東に向かってゆっくりと移動していた。子どもたちは高度10000mに形成された美しい雲に見とれていた。